

食育におけるITの役割

大屋 洋子 *Written by Yoko Ohya*

食育基本法が施行されて3年。食育という言葉はすっかり定着したかに見える一方で、その定義をちゃんと語れる人は意外に少ない。電通食育プロジェクトの調査結果からも「食育」は、消費者から実にさまざまなイメージで捉えられていることがわかる。

電通では、食育を「心と身体のために『おいしく食べる力』をつけること」と定義している。その『力』とは、「選ぶ力」「^{ととの}調える力」「楽しむ力」「感謝する力」の4つ。旬や産地、栄養素や添加物などの知識を身につけることは、おいしく安全な食材を選ぶ目を養うことに等しい。調えるとは、調理だけでなく、盛り付けや食卓の演出も含まれる。楽しく食卓を囲んだときの食事は、なぜかいつもおいしく感じられる。その際、マナーは不可欠であるし、食にまつわる知識は会話のエッセンスにもなる。生産者の汗を知ること、食が殺生で成り立っていることを知ることで、おのずと感謝の心は生まれるだろう。その心は、「いただきます」や「ごちそうさま」という言葉として発され、目の前の食事は、よりおいしく感じられるはずである。

食育は、本来、家庭の食卓で行われるべきである。そういう声は少なくないし、確かにそのとおりだろう。しかしながら、このご時世、常に家族全員で食卓を囲むこと、ましてや世代を越えた伝承など、現実的には難しいのも事実だ。ただ一方で、今の時代だからこそ実現できる「食育のカタチ」が存在するのではないか。その役割の一端を担うのがITである。今や食材のトレーサビリティも、

食品の栄養価や添加物情報なども携帯やPCからカンタンに知ることができる。「ヘルシー」「親子で」などさまざまな切り口のレシピや料理のコツも即時に検索可能だ。マナーもゲーム感覚で知ることができるし、食の蘊蓄を共有したり、同じ嗜好の仲間を見つけたりするなど、ITなら世代やエリアを越えてつながり、楽しむことができる。バーチャルとはいえ、ネット上で野菜の苗を育てたり（水やりを忘れれば当然枯れる）、世の中の実情を知ったりすることは、感謝の心が芽生えるきっかけになるかもしれない。ITのもつ可能性は計り知れない。

企業の事例をみても、主に食育に取り組んでいる35社のうち34社がITを主軸とした施策を行っており、その数は、508事例のうち実に185事例にものぼる。企業の食育コミュニケーションにおいても、ITは重要なツールでありメディアなのだ。

とはいえ、当然のことながらITは、家庭の食卓に取って代わられる存在ではない。食育にとって、五感で感じ取る経験は必要不可欠であり、残念ながらITではそれが適わない。8割の人が大切だと考える「感謝する力」も、土の感触、流した汗をとおして、はじめて身に付くものだろう。ITがもつ可能性によって食育の輪が広がり、そして家庭の食卓に笑顔が生まれる、そんな展開を期待したい。

CEL

大屋 洋子 (おおや・ようこ)
株式会社電通消費者研究センター消費者研究室
(ウェルネス&食育担当)